

2025 年 3 月 7 日 (金)

世界を駆けるニッポンの研究者

Notebook&Pen から AI&IoT へ

南極から赤道直下の熱帯雨林、アフリカの乾燥地帯まで世界各地を飛び回ってきた研究者のここでしか聞けない調査生活から AI や IoT を駆使した最先端の科学技術までお話しします。



知っている動物はいるかな？ (答えは裏面に)

日程 3月7日 (金) 13:30~17:00

プレイベント 13:30~ 海外研究・調査・生活 Q&A コーナー

開会 14:00

講演1 14:10~ フィールドワークを綴る、ノートとペンから AI&IoT へ (持田浩治)

講演2 14:30~ バイオロギングで探る、空・海・大地を巡る動物たちの行動 (依田憲)

講演3 15:20~ AI によって研究活動はどのように進化したか (伊藤真)

講演4 16:00~ ガボン共和国において農村環境を利用するマルミミゾウの生態 (大坂桃子)

閉会 17:00

会場 出島メッセ長崎 (長崎市尾上町4-1)

入場料 **無料**

申込み 右記の QR コード、もしくは大学ホームページよりお願いいたします

問合せ 長崎総合科学大学 改革総合支援班 TEL: 095-838-3118

主催 長崎総合科学大学



<https://forms.gle/XxUgDmoXm15Ku1bt6>

これまで生態学者と呼ばれる研究者は、ノートとペンをもって、南極から赤道直下の熱帯雨林、アフリカの乾燥地帯まで世界各地のフィールドを飛び回ってきました。無人島で生活したり、ゾウに追いかけられたり、熱帯病にかかったり、そこには日常生活とはまた違う世界が広がっています。近年、こうした研究分野にも AI や IoT 技術を取り入れた計測・解析機器が活用され、またロボティクス分野などとも融合してバイオミメティクスとよばれる新技術を生み出すようになりました。今年度は、**長崎総合科学大学の大学院新技術創成研究所**の公開講演会「21世紀の科学技術」として、「**世界を駆けるニッポンの研究者**」と題し、ここでしか聞けない生態学者の調査生活から最先端の科学技術を、長崎の高校生から一般市民、シニア世代に伝えたいと考えています。また、こうした研究や新技術が、SDGs と呼ばれる持続的で豊かな社会を形成するためにどのように関わってくるのかについても考えてみたいと思います。

研究者に質問しよう！

シンポジウム本編は 14 時開催になりますが、13 時 30 分から講演者の皆さん参加の Q & A コーナーを開催します。事前に申込 **Google** フォームで受け付けた質問（無人島に 1 つ持っていけるとしたら何を持っていきますか？南極で研究をしてみたいのですがどうすれば行けますか？アフリカでの生活で一番困ったことってなんですか？などなど）に対して講演する研究者の方々に答えてもらいます。**ぜひ質問を投函してください。**

講演者 & パネリスト 紹介

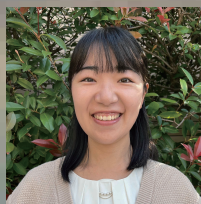


依田憲 よだ けん

京都大学理学研究科博士。国立極地研究所研究員などを経て、現在、名古屋大学大学院環境学研究科教授。専門は海鳥類の動物行動学。

伊藤真 いとう まこと

京都大学理学研究科博士。四天王寺大学講師。長崎総合科学大学新技術創成研究所客員研究員兼任。専門はカエル類の鳴き声コミュニケーション。



大坂桃子 おおさか ももこ

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科博士課程。ガボン共和国ロベ国立公園周辺地域の農村をフィールドに、村を訪れるマルミミゾウの生態を研究。



大庭伸也 おおば しんや

岡山大学自然科学研究科博士。日本学術振興会特別研究員 PD などを経て、現在、長崎大学人文社会科学域（教育学系）准教授。専門は昆虫生態学。長崎の離島にもたびたび出勤中。

持田浩治 もちだ こうじ

京都大学理学研究科博士。慶應義塾大学助教などを経て、現在、長崎総合科学大学新技術創成研究所准教授。専門は鮮やかな体色に関する動物行動学、動物心理学。



（表面の答）左から、南米アルゼンチンのマゼランペンギン、南米ペルーのアオアシカツオドリ、京都府のナゴヤダルマガエル、アフリカ・ガボン共和国のマルミミゾウ、インドネシアのプロファンディコラメダカ、中米コスタリカのイチゴヤドクガエル。

（チラシに使われている写真）表面写真はインドネシア・スラウェシ・ムナの調査地の泉。私たちが中華系以外で初めて訪れた外国人らしい。裏面写真は南米ブラジル・アマゾンの玄関都市マナウスの川沿いのロッジより。